

現代の高校生における友人関係の捉え方

岩瀬 真寿美*・奥田 彩海*
松下 晴彦**

序

第1章 青年についての先行研究

- (1) 「情緒肥大化」する1970年代の青年
- (2) 「対人関係が苦手」という日本の青年像
- (3) 現代日本の青年像に関する否定的見解

第2章 調査の方法と結果の分析

- (1) 調査の概要
- (2) 高校生が希求する「深い友人関係」
 - 1) 調査結果にみる「深い友人関係の希求」と「友人関係の難しさ」
 - 2) 「群れ指向群」、「関係回避群」、「個別関係群」の三類型
 - 3) 「個別関係群」の減少と「個別関係群」の希求の増加
- (3) 高校生が意識する「深い友人関係」と「浅い友人関係」
 - 1) 調査結果にみる「役割別に捉えられる友人」
 - 2) 関係に応じた「自己の変化」
 - 3) 肯定的に捉えられる関係に応じた「自己の変化」

第3章 エリクソンにおける高校生の発達段階と発達課題

- (1) 青年期に不可欠なものとしての「アイデンティティの拡散」
- (2) 「アイデンティティの拡散」を経験しないことの危険性
- (3) アイデンティティの模索の意義

おわりに

* 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程学生

** 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授

序

本稿は、「現代の青年像」に関する否定的な見解がある中で、青年自身は実際、どのような意識を持っているのかについて焦点を絞り、とりわけ、友人関係の捉え方を中心に考察することを目的とする。さらに、現代の青年は実際に過去の青年よりも「病的」であるのか、それは全ての現代青年に当てはまるのか、「病的」であるという指摘は文化的な観点を無視しているのではないか、といった問題についても併せて論及する。

第1章では、1970年代の青年像（に関する研究）と現代の青年像について概観する。当時の研究を吟味すると、過去の青年像と現代の青年像がそれほど大きく変化したわけでもないことが分かる。1970年代の研究は、過去の青年像に影響を与えた社会的背景をも分析の対象としており、現代の青年像を分析するにあたって重要な先行研究である。

第2章では、現代の青年自身の意識を調査した独自のアンケートを基に、高校生が持つ「深い友人関係」の希求と「友人関係」の持ち方の難しさについて、あるいは高校生が意識する「深い友人関係」と「浅い友人関係」について考察する。ここでは、現代青年を包括的に捉えるのではなく、タイプ別にカテゴリー化する研究や、個としての青年の中に「異なる自己」の使い分けに注目した研究を取りあげ、比較検討する。

第3章では、第2章において言及した「自己の使い分け」との関連から、アイデンティティについての研究を取りあげる。アイデンティティに関する研究は、西洋社会において生きる自己を前提としたものである。西洋において、「アイデンティティの拡散」もまた意義があるものとして、必ずしも否定的に捉えられているわけではないが、日本においては、否定的にというより肯定的にすら捉えられている可能性があることについて論究する。

第1章、第2章、第3章を通じて、批判的に語られがちな「現代の青年像」がすべての青年に当てはまるわけではないこと、青年自身は（の側からみると）、自身の友人関係をそれほど否定的には捉えていないことについて明らかにしていく。 （岩瀬真寿美）

第1章 青年についての先行研究

（1）「情緒肥大化」する1970年代の青年

本稿では、現代の青年（とりわけ高校生）が考える友人関係について考察していくが、その前に、過去の青年（とりわけ高校生）たちは、友人関係をどのように捉えていたのだろうか。

松原治郎は1974年に著した『日本青年の意識構造』の中で、当時の調査を基に青年の意識について考察している¹。その中で、友人関係の捉え方についても考察している。松原が参考にした主な調査は、総理府青少年対策本部が実施、また委託した、『現代青少年の意識と行動の特質に関する研究』（1968年12月実施）、『青少年の連帯感などに関する調査』（1970年10月実施）、『世界青少年意識調査』（1972年11月実施）である。松原の研究では、世界各国の青年との比較も交えて、1970年前後における日本の青年の意識や行動について触れられているが、調査の対象となった「青年」には、（当然）高校生よりも高い年齢層が含まれている。以下では、まずは、青年一般の意識調査結果と松原の論考について概観する。

本稿の考察対象である「高校生の友人関係の捉え方」に関連のある項目を捨てていくと、当時の日本青年は、4人に1人の割合で心を打ち明けて話せる相手がおらず、これは欧米の2倍の割合であった。他人との関わりについても、心の中に親切心を持たないわけではないが、対人関係において積極的に表現することを躊躇してしまうことが、調査結果から読みとれるとされていた。また、他国の青年より冷たい感じが強い日本青年だが、友だち付き合いに深入りした方が良いと思っている者が7割近くと、世界一の割合だったことも指摘している。これを踏まえ松原は、当時の日本の青年が「人間不信」で「クール」だといわれているが、実際は極めて「ホット」で「いつも人を求め、人と人との実態的・内容的な深いつき合いを望んでいる」のだが、「現実の変動性・流動性の高い社会で、しかも子どものときから常に他人と競争するようにのみしむけられてきているだけに、求めても得られないこと」が多かったり「求めたが傷つけられたという経験をすることが多い」と述べている²。

以上のような青年の意識の背景として、松原は「ドライ」と「情緒肥大化」の2点を指摘している。日本の青年は、義理や恩義にとらわれず一見ドライだが、情緒的な刺激に対する反応が非常に高く、最終的には情動的な人間接触に価値の中心を置いていると結論づけている。そして、様々な項目とそれらの調査結果を総合すると、日本の青年は、不満は多いが社会や将来への展望は楽観的で、関心は身近なことに限定されて狭く、考え方に「甘え」の余地が多いという。ここでの「不満」の内容をみると具体的ではなく、このままではいけない気持ちや諦めの気持ちも含まれていることから、「不満」の意味は、心の支えや逃げ場のない「不安」であると述べている。

調査が行われた当時の社会は、高度経済成長の終盤であり、人口が都市部に集中し、1975年までは地方から都市部の工場へ青年の集団就職が行われていた。60年代から70年代の日本は、経済的発展と生産力の拡大に大きな価値が置かれ、このような社会的・経済的状況は、教育政策のあり方や青年がもつ価値観にも大きな影響を与えていた。例えば、1958年の学習指導要領改訂により、学習指導要領が法的拘束力を持つようになった。その内容は、科学技術教育に力を入れた系統主義的なものであり、全国学力テストも開始された。こうした教育政策と新しいカリキュラムの実施により、次第に学校での教授と学習についていけない、いわゆる「落ちこぼし」の子どもが増加し、社会問題となった。さらに高度経済成長期前後より、高学歴を取得し高い収入を得るエリートを目指す風潮が広がり、大学受験と高校受験の競争が激化するようになった。1970年代には高校進学率が9割を超えている。このような社会状況と教育の中で育ってきた青年が、この調査の対象となっているのである。それまでの価値観が大きく変化し、同世代との競争激化を受けて、心の中では親密な人間関係を求めつつもそれが実現できずに「不安」を抱えているが、表面では「ドライ」にならざるを得ない青年の意識が、友人関係の捉え方に大きく影響を与えていたことは間違いないだろう。

(2) 「対人関係が苦手」という日本の青年像

『世界青少年意識調査』は、松原が取りあげた1972年の第1回から約5年ごとに実施されており、直近では第7回の調査が2003年に行われている。調査は18歳から24歳までの男女を対象とし、調査員による質問用紙を用いた個別面接で、各国とも1000サンプル回収を原則として行われている。毎回11カ国で実施されていたが、第7回の調査対象国は、日本、アメリカ、ドイツ、スウェーデン、

韓国の5カ国である。

第1回から第7回までの友人関係に関する調査項目をみると、第7回調査では、日本青年の友人関係における満足度は、「満足」「やや満足」を合計すると98.1パーセントとなっており、調査が始まった頃に比べ、近年は満足度が高い結果が続いている。これは、各国と比べても変わりはない。第7回の調査において親しい友人がいる割合は、96.7パーセントとなっており、各国と比べても低い数字ではない。ただし、親しい友人の内訳をみると同性と答えた割合が最も多く、他国の回答と同様であるが、日本青年が異性や恋人と答えた割合は各国に比べて10パーセント以上低かった。友人を得た場所は、どの年代の調査でも学校と答えた割合が一番高く、これは調査対象となった他国でも共通している³。

1998年に行われた第6回の調査では、特に「友人との接し方」について調査している。内容は、「相手が怒っているときに、うまくなだめる」「知らない人とでも、すぐに会話を始める」「話し合いの輪の中に、気軽に参加する」「何か失敗したときに、すぐに謝る」「自分とは違った考えを持っている人とうまくやっていく」の5項目について、「いつでもできる」「なんとかできる」「できない」「わからない」という選択肢で回答を求めたものである。

日本青年が「いつでもできる」と回答した項目で一番多かったのは、「何か失敗したときに、すぐに謝る」という項目であり、55.2パーセントである。しかし、どの項目においても「いつでもできる」と回答する割合は、対象となった11カ国の中で低い方に位置する。日本青年が「できない」と回答した割合が一番高かった項目は、「知らない人とでも、すぐに会話を始める」であり、23.6%であった。次に高かったのが「自分とは違った考えを持っている人とうまくやっていく」という項目で17.9パーセントとなっている。これらの二つの項目については、アメリカ、イギリス、フィンランドでいずれも「できない」と回答した割合が低く、アジア地域の国々やロシア、ドイツ、フランスでは、日本と同じ位かそれ以上の割合で「できない」と回答しており、各国の文化や習慣も回答結果に関係しているのではないかと推測される。これらの回答結果からは、日本青年が、比較的自分の生活や友人関係の外にいる人間と付き合うことを苦手としているということがいえるだろう。また「相手が怒っているときに、うまくなだめる」について、「いつでもできる」と回答した割合は、質問項目の中では一番低い。このことは、日本青年が、相手に干渉することには極めて慎重であるという姿勢がうかがえる。また概して、各国と比較して、日本青年に特に「できない」という回答が目立つ項目はなかった⁴。

(3) 現代日本の青年像に関する否定的な見解

1960年代後半から70年代前半の青年を対象とした松原の分析から約40年の間、友人関係に関する日本青年の意識は確実に変化したといわれてきた。そして昨今においても、青年の意識に問題があるという見方が各方面からなされていることが多い。

速水敏彦は、現代の若者は、自尊感情が低く、他者軽視傾向することで得る「仮想的有能感」が高い型と、この「仮想的有能感」も低い萎縮型が多いことを指摘している⁵。また諏訪哲二は、社会状況や教育制度の変化などにより、子どもがいつまでも「全能感」をもち続けていることを指摘している⁶。本来、人間は、学童期から青年期、そして成人期にかけて、裏づけのない自尊感情を

現実とすり合わせて、一度は打ち崩されながらも、その後自分の経験や知識に裏づけられた自尊心を確立していく過程を経て成長していくものである。ところが、速水、諏訪の両氏によれば、現代の若者は、他者を見下すことで自分の有能感を保持し、それを自尊心として持つようになると捉えられている。

確かにこのような意識（仮想的有能感としての自尊心）のまま大人になることには、大きな問題があると思われる。しかし、青年期の前半にいる青年（現代の高校生）の多くが、本当に指摘されているような問題ばかりを抱えているのだろうか。特に、人が成長していく過程で欠く事のできない人間関係について、実際のところ、どのように考え、どのように行動しようと考えているのだろうか。（奥田彩海）

第2章 調査の方法と結果の分析

（1）調査の概要

第1章では、現代の高校生における「友人関係の捉え方」を検討するための前段階として、「情緒肥大化」する青年、対人関係を苦手とする日本の青年の傾向、および現代の日本青年像に関する否定的な見解について指摘した。現代の青年像については、他にも「内省が乏しい」、「遊び指向・面白指向」、「モノによる差異化」、「自己の断片化」、「自分さがしの長期化」、「同調的ひきこもり」、あるいは「自己愛の強化」などの消極的な像をあげることができる。このような否定的な見解に対し、実際のところ、現代の高校生が、彼（女）らの友人関係についてどのような意識をもっているかを捉えるために、次のようなアンケート調査を実施した。

平成19年8月、「学びの杜 人間発達科学探究講座（サマースクール）」参加者41名（男性6名、女性35名。）を対象に、「高校生の意識に関するアンケート調査」と題して、アンケート調査を実施した。被調査者の年齢の範囲は16-18歳である。また、この（高校生を対象に実施した）アンケート結果と比較をするために、「大学生の意識に関するアンケート調査」と題して、平成19年8月、M大学の集中講義受講生76名（男性30名、女性46名。）を対象に、ほぼ同じ内容のアンケート調査を実施した。被調査者の年齢の範囲は20-22歳である。

高校生にはまず、「心を打ち明けて話すことができる人の有無」を聞き、「有り」を選んだ人には「それが誰」であり、「その人に何を求めるか」について回答をもとめた。また、「自身の喜びをまず誰に伝えたいか」について聞いた。その他、友達付き合いに関して「深く関わるべきかどうか」について聞いた。大学生に実施したアンケートは、ほぼ高校生のものと同じであり、友達付き合いについて、あるいは大学に入ってから、人間関係に関する考え方が変化したかどうかについて、自由記述の項目を追加した。以下、本章でアンケート調査の結果を分析していくが、その際、現代の青年像について、極論することなく包括的に捉えようという立場の研究を適宜、参照した。

（2）高校生が希求する「深い友人関係」

1) 調査結果にみる「深い友人関係の希求」と「友人関係の難しさ」

アンケートでは、高校生の3割が「友人と深く関わらない方が良い」と答えている。大学生と比較すると、大学生の方が「友人と深く関わる」方を選ぶ割合が1割程度多い。その理由として大学

生の自由記述には、「友人と深く関わる」ことによって自分の成長につながる、相手を知ることができる、あるいは深く関わっていない人はそもそも友人とは呼べない、という答えがあった。逆に「深く関わらない」方を選ぶ理由として、「面倒」「踏み込んでいけない領域がある」「深く関わりとお互いにとって良くない」、あるいは「束縛になる」という答えがかえってきた。

この結果からは、現代においても、1970年代とほぼ同様に、7割程度の青年が、「深い友人関係」を求めていることが分かる。一方で青年たちは、人間関係について「大切であるが難しいもの」と認識している。1970年代の松原の研究においては、この原因を競争社会にあるとしていた。現代の青年にとって、どのような理由から、人間関係は「難しい」と認識せざるを得ないのであろうか。その理由に対しては、一面的で単純な青年像により即答することもできる。しかしながら、ここではその前に、青年の実態をより慎重に把握するタイプの研究（概念的枠組みの可能性）について考察してみたい。

2) 「群れ指向群」、「関係回避群」、「個別関係群」の三類型

現代青年を包括的に捉えるタイプの研究として、先ず、岡田努による研究を検討する。岡田は、現代青年像をめぐる消極的イメージの言説に対して、三つの批判点を提出している。すなわち、i) すべての若者にとって人間関係が希薄になったり、群れて表面的な関わりを持つだけになってしまったわけではないこと、ii) 現代の若者というイメージは、実は様々な若者のイメージが複合されたものであること、iii) 「今どきの若者」イコール「不健全・不健康」とは必ずしもいえないことの三点である⁷。岡田によれば、青年は、大人と子どもの境目において立場がはっきりしない「境界人」であり、身体的変化の思春期に対して心理的変化の時期の意味を持つ。青年期の始まりは中学生から高校生にかけての年代であり、終わりについてはかなり広い年代に分布しているという立場をとる⁸。したがって、本稿で分析する高校生の年代は、岡田の考える青年期に含まれることになる。

岡田は調査を始めるにあたり、発達心理学・青年心理学の一般的な見解において、青年期の友人関係には、お互いの内面に触れ合うような親しい関わりを渴望するという特徴があることを指摘している。一方で、現代の青年は、そのような親しい友人関係を遠ざけたり、友人から低い評価を受けないように警戒したり、また互いに傷つけあわないように気をつかって、表面的にだけ円滑な関係で済ませるといった言説が1980年代半ば頃から指摘されるようになったという事実を念頭に置いている⁹。このような見解については、第1章の(1)で考察した1970年代の青年にも当てはまるものである。

岡田は具体的に、青年(中・高・大学生)を「群れ指向群」(表面群)、「関係回避群」、「個別関係群」(伝統群)の三つの群に分けている¹⁰。第一の「群れ指向群」は、深刻さを避けて楽しさを求め、友人といつも一緒にいようとする群である。しばしばこのような青年像は否定的に取りあげられることが多い。第二の「関係回避群」(友人関係に距離をおいた関わり方をすることで傷つけあうことを避けるグループ)は、当たり障りのない会話で済ませて、友人との内面的な関わりを避ける傾向を持つ群である。この青年像についても、「病的なもの」として語られることが多い。第三の「個別関係群」は、多くの友人より一人と付き合うなど、友人と個別的で深い関わりを求める群で

ある¹¹。第三の「個別関係群」を「伝統群」と呼ぶことから、岡田が「個別関係群」を従来の青年像とみていることが分かる。「個別関係群」はいわゆる過去の青年像であり、このような青年が現代にまだ存在することを岡田は明らかにしようとしたのである。

三つの群の青年は、それぞれ異なるタイプの友人を求める。「群れ指向群」が求める友人は遊び仲間としてのそれであり、「関係回避群」は友人に物理的な近さを、「個別関係群」は価値観の一致を求める¹²。「群れ指向群」は他人からの視線や評価におびえており、「関係回避群」は自尊感情が低いため、対人恐怖傾向が全般に高い¹³。「注目・賞賛欲求」や「他者評価過敏」が高いため、他人から良く思われることを求めるのであるが、それが満たされないことをおびえるため対人恐怖となる。第三の「個別関係群」については、自尊感情や自己主張性が他のグループより高く、自分自身を素直に尊重でき、比較的健康的な自己愛を育むと、岡田は肯定的にみている¹⁴。

3) 「個別関係群」の減少と「個別関係群」の希求の増加

現代においては「個別関係群」が減少し、「群れ指向群」が多くなったという。表面的な関わりしか持たない若者が年齢と共に増加するように見える。しかし岡田によれば、このことは、むしろ年齢と共に社会とのつながりを持つことができる者が増えているという健全さの証左としてみることもできるという¹⁵。社会的スキルを獲得しているかどうかについては、「関係回避群」や「群れ指向群」よりも「個別関係群」の方が低いからである¹⁶。

青年自身が友人関係について「表面的である」と自覚しているかどうかについては、「表面的な関係」をとっているのは周りの友人の方であり、自分はそうではないと考えているという調査結果がある¹⁷。したがって、自身の友人との付き合い方が「表面的である」という意識を持っているわけではなく、創られた若者像に皆が合わせていった結果、それが本物の青年の行動になってしまうのではないかと岡田は危惧する¹⁸。

「友人と深く関わりたい」と望む青年が7割近くいたという本稿でのアンケート調査の結果と、「個別関係群」が減少しているという岡田の指摘を照らし合わせると、「群れ指向群」や「関係回避群」の中にも「個別関係群」の性格を取り入れたいと希求する青年が多いはずだということが推察できる。次に、青年像を包括的に捉えるタイプのもう一つの研究として、一人の青年の中にある「自己の使い分け」に着目した、佐久間路子による研究を参照しながら、本アンケート調査結果を分析していくことにする。

(3) 高校生が意識する「深い友人関係」と「浅い友人関係」

1) 調査結果にみる「役割別に捉えられる友人」

高校生にとって、「どんなことでも心を打ち明けて話すことができる人」に「親友や友人」をあげた高校生は60%近くであり、「家族」の30%を大幅にしのいでいる。この結果は、大学生についても同じである。その人に何を求めるかについては、「親友や友人」には、「遊んで騒ぐ」「かまって欲しい」「一緒になって喜んだり泣いたりして欲しい」「話をきいて欲しいし話をして欲しい」といった要求が多く、友人との対等な関係を重視したものが多かった。一方で、「母親」には、助言や相談といった依存の傾向がみとれた。年代が上がるにつれて、友人に「話を聞いて欲しい」と

する答えが圧倒的に多くなり、助言を求めることまでは要求しなくなる。友人に心を打ち明けて話しても、そこに適切な助言を求めるという欲求は少なくなるのである。ここには、現代青年の自律的な面がうかがえる。

「どんなことでも話せる人」に「友人」をあげた人が圧倒的に多かったのに対して、「自己の喜びを話したい人」に「親友や友人」をあげた高校生は、「家族」をあげた高校生と同じく45%であった。この結果は大学生についてもほぼ同じである。これらの結果を比較すると、青年が相手によって話す内容を使い分けていることが分かる。ここから推察できることは、現代の青年が「友人」と「母親」とによって、話す内容を変えているのと同様に、友人についても、「相談するための友人」と「喜びを分かち合いたい友人」というように「役割別に友人を捉えている」のではないかということである。この仮説を裏づけるのではないかとと思われる高校生の記述として、人間関係についての自由記述の中に、「うまく場をしのぐ人間関係」と「信頼による人間関係」とに分けているというものがあつた。

大学生各人の「人間関係についての考え方」に関して、高校生のときから変化したかどうかについて自由記述してもらったところ、大学生は、自分たちが大学生になることによって、人付き合いが増えたことを自覚していることが分かる。また、人間の多様性を認識しており、「全ての人と深い人間関係が築けるわけではない」と記述した人が多かった。「浅い友人」という種類の人間関係ができたということもあがる人もいる。「相手に応じて自己が変化する」ことについては肯定的に認識する意見が多かった。

2) 関係に応じた「自己の変化」

現代青年を極度に一般化、あるいは抽象化しない観点から考察するタイプのもう一つの研究は、佐久間路子によるものである。彼女の研究は、一人の青年の中で、状況や文脈に応じて異なった自己が経験されているところに着目する。現実的には他者に応じて自己は異なる自己を見せるにも関わらず、関係に応じた「自己の変化」についてこれまであまり研究されてこなかったことを指摘する¹⁹。したがって、他者との関係に応じて自己が変化する理由や、変化することに對する自己認識について、および変化することを適応と捉えるか否かについて考察している。

佐久間は、アメリカの心理学者であり哲学者でもあるW. ジェームズ (William James) (1890) の「人は自分を認めてくれる人の数だけ社会的自己を持つ」という指摘の中に、関係に応じた自己の多面性をみている²⁰。ジェームズによれば、客我は「物質的客我」「社会的客我」「精神的客我」から成っており、「一人の人は、彼を認め彼の印象を心に蔵する個人の数と同数の社会的自我を有って居る」。また、「人間は事実幾つかの自我に分裂する。…此の分裂は時に相互に調和せぬ分裂であつて、…或は此の分裂は相互に完全に調和した分裂であることもある」と指摘する²¹。関係に応じて自己が変化するということは、必ずしも見せかけの自己を表明することではなく、変化をしても、偽りではない、また演技でもないという可能性がある。青年期にかけて、関係に応じて自己が分化する程度が高まる要因として、第一に認知能力の発達、第二に青年期に自己を取り巻く関係性が変化する事、つまり、具体的には幼児期から青年期にかけての自己を取り巻く関係性の移行（母親から友人へ）、第三に自己開示の深さや内容が、発達に伴い相手に応じて分化していくこと、

第四に学校環境の変化など外的な要因など様々な要因がある²²。

佐久間は「自己の変化」について、ある特性が強調されたり抑制されたりしたもの、すなわち自己の関係特異的な部分の表れと想定できるとする²³。したがって、岡田の研究と照らし合わせてみるならば、一人の青年の中に「群れ指向群」「関係回避群」及び「個別関係群」の特性があり、他者に応じてどのタイプが発揮されるかが変化するのだと考えられる。

3) 肯定的に捉えられる関係に応じた「自己の変化」

「自己の変化」についての自己認識は、中学生、高校生、大学生という年齢別、あるいは性別によっても異なる。「自己の変化」を肯定的に捉える傾向は、年齢が上がるにつれて高く、また女性よりも男性の方が高い²⁴。

何によって、どのように、何のために自己を変化させるのかという観点からも、佐久間は調査を行っている。何によって自己が変化するかについては、「相手との関係の質（親密さ、気を許す程度、信頼感など）」によって自分が変わるという記述と、「特定の相手（母、友人、恋人、目上の人）」によって自分を変えるという記述が多くみられる。また「相手の性格や行動」や「相手が自分に対して持つイメージによって」という記述もみられ、対象者の多くが相手や関係の質が、「自己の変化」に影響すると感じている²⁵。どのように自己が変化するかについては、相手によって「いろいろな側面が出る程度が違う」「見せる部分と隠す部分がある」「内面や本音を出すか出さないか」というような、自己開示の程度の変化に半数近くが言及している²⁶。何のために自己が変化するかについては、「仲良くしたい」「嫌われたくない」「相手を理解したい」「相手を傷つけない」というような相手や関係への気遣いが表われた記述が多くみられる²⁷。

相手に応じて自己が変化することについては、多くは肯定的で、関係に応じて自分が変わることは、「必要」なことで「当然だ」というように可変性を肯定する記述を佐久間は読みとる²⁸。「関係に応じて変化する」ということは、必ずしも自己のすべてが変化するということを意味するのではなく、「関係に応じて変化する部分」と、「変化しない部分」があると捉えられているのではないかと推察している。高校生は、友人との関係の質によって自己が変化することに抵抗を感じていない。すなわち、「自己の変化」をアイデンティティの拡散、あるいは否定的な自己分裂としては捉えていないのである。

以上、第2章では、アンケート調査から、高校生が「深い友人関係」を希求していること、あるいは高校生が「深い友人関係」と「浅い友人関係」について意識していることについて考察してきた。高校生における友人関係の捉え方についての議論は、ひいては関係に応じた「自己の変化」へと問題の焦点が移っていった。友人関係の問題は、「自己の問題」ともいえる。したがって、第3章では、アイデンティティとの関連から、高校生の友人関係について考察をする。（岩瀬真寿美）

第3章 エリクソンにおける高校生の発達段階と発達課題

(1) 青年期に不可欠なものとしての「アイデンティティの拡散」

E. H. エリクソン(Erik Homburger Erikson) (1968)は、人間は生涯にわたってパーソナリティの発達が続くという観点から、誕生から死に至るまでのライフサイクルにおける8つの発達段階を

提示している³⁰。フロイトが心理・性的発達を提唱したのに対して、エリクソンは社会的関係の中で形成されるアイデンティティの心理・社会的発達段階を提唱したのである。エリクソンは、各発達段階について年齢を厳密に定めていないが、発達段階に関する多くの研究より、高校生はこの青年期の只中にあると考えられる。

それぞれ段階において同調傾向と失調傾向の葛藤と、そこから心理・社会的な強さが現れるとしており、例えば、青年期では、「アイデンティティ」対「アイデンティティ拡散」(identity vs. identity confusion)の葛藤から、忠誠 (hope) が現れるとされる。ただし、各段階に示された対立において、対比する二つの特性には相補性があり、肯定的な側の内容が相対的に高い状態で段階を経過することが、健康な発達だと考えられている。またエリクソンは、「発達の成熟 (及び心理・社会的危機) がそれぞれ、より高次の、発達途上にある段階に新たな意味合いを付与するとともに、より「低次」の、すでに発達し終わった段階にも新たな意味を付与することを示している」ことを強調しており、各段階が深く関わりを持つものであると述べている³¹。そして発達の各段階は、人格の発達という精神的過程、社会的過程、そして身体的過程が、生涯に渡り繋がりをを持って進んでいくものであるとしている。

青年期には、幼児期から学童期までの自分から脱して、新たな自分というものを模索するようになる。やがて見つける自分を、エリクソンはアイデンティティ (identity) と呼んだのである。エリクソンはこのアイデンティティを、「(1) 幼・児童期における個人の様々な同一化の中から、選択的に、或るものは肯定し、或るものは拒絶することから現れ、そして、(2) その時代の社会的過程が若者たち一人ひとりを認証する (identify) 仕方」から現れてくるものとしている³²。アイデンティティとは、過去から現在、未来に至るまで私は私であり、私というものを他者も認めてくれている、ということが感覚として分かることなどを意味する。このアイデンティティという「偏在的な感覚は、幼・児童期に経験してきた変化する多様な自己像 (そして青年期に劇的に再演されるそれら) と、若者たちに対して選択と系統のために提供される様々な役割機会とを、徐々に調和させていくもの」である³³。青年期には「自分が何者であるか」「自分は何になるのか」「自分はどんな自分を選ぶべきなのか」ということが問われることとなる。そこでは、現実や大人社会と突き合されながらも、これまで自分を突き崩したり見失う経験を経て、自己を選択し、自己を定義し、新たな自分というものを確立させていかななくてはならない。ただし、今まで獲得してきたアイデンティティや経験を完全に捨て去ってしまうことを意味するのではない。その過程は平穏なものばかりではなく、時には重い精神疾患を患ったり、反社会的な道に入っていくこともある。

エリクソンは、アイデンティティの対立命題として、「アイデンティティの拡散」があるとしている。J. コールマンとL. ヘンドリーは、エリクソンの述べる「アイデンティティの拡散」には以下の4つの構成要素があると指摘する。第一が、「自分自身のアイデンティティを失う恐れから、親密な対人関係に関与したり取り組むことを恐れる」ことからくる「親密性の問題」である³⁴。第二が、計画が立てられないことや時間感覚が持てないといった「時間的展望の拡散の可能性」である³⁵。そして第三に、「仕事や勉強において現実的なやり方で自分の能力を利用することが出来ない」と感じてしまう「勤勉性の拡散」であり、第四に「両親やその他の重要な大人が望むのと正反対のアイデンティティを若者が選択してしまう」という「否定的アイデンティティの概念」である

³⁶。青年期においてこの四つの要素の全てを経験するとしているわけではないが、アイデンティティの拡散自体は明らかに標準的かつ必然的な経験であると捉えられた。

また青年期に出現する「忠誠」という強さは、「幼児的な信頼と成熟した進行の双方と強い絆で結ばれており、導いて欲しい欲求を親的人物から指導者に向け替えたもの」である。この「忠誠」と対をなす不協和特性に、「役割拒否 (role repudiation)」がある³⁷。この「役割否定」はアイデンティティの形成に役立つと思える「役割や価値と、自己には異質なものとして抵抗し戦わねばならぬ役割や価値とを峻別しようとする、積極的かつ選択的な衝動」のことであり、エリクソンは、アイデンティティの形成にはこの「役割否定」がある程度必要となると述べている³⁸。人間にとって、変化する環境に対し継続的な再適応をしていくには、この「役割否定」が必要であり、「役割否定」は、個人のアイデンティティの境界を定めることに役立ち、実験的な忠誠 (loyalty) を喚起する。そしてこの実験的忠誠が永続的な提携関係へと変容していくのである。

このように、青年期は「アイデンティティの拡散」や「役割否定」を経験しながら、アイデンティティの獲得を模索する時期である。また、アイデンティティへの問いは、必ずしも一度解決してしまえば完了するものではなく、青年期後期から成人期初期にかけて繰り返し現れるものである。このアイデンティティ獲得のための様々な役割や価値を試行錯誤的に選択する余裕として、社会的責任が軽減され、自分の可能性を自由に試す時間のことを、エリクソンは「心理・社会的猶予期間 (モラトリアム)」と呼んだ。高校生にとっては、様々な価値や役割に否定的な目を向け、これまでの自分を脱して新たな自分を確立しようとしているこの不安定な時期こそ、その後、アイデンティティを形成していく上で不可欠な経験をしているのだと捉えることができる。

(2) 「アイデンティティの拡散」を経験しないことの危険性

J. L. マーシャ (Marcia, J. L.) (1966, 1980, 1993) は、エリクソンが提唱した「アイデンティティの獲得」と「アイデンティティの拡散」という概念を実証的に分析し、アイデンティティの状態を「アイデンティティ達成型」「モラトリアム型」「早期完了型」「モラトリアム拡散型」の4つに類型化する見方を提唱した³⁹。この4つの見方は、アイデンティティを模索する青年の姿を詳細に描いたものになっており、この見方の中では、アイデンティティを早く獲得することがその人にとって望ましいとは限らないことが示されている。「早期完了型」は、アイデンティティ獲得のための模索時期をほとんど経験していないが、社会や親の価値観・生き方をそのまま受け入れ、それを自分のアイデンティティとしてしまうようなタイプである。この「早期完了型」の人は、自己をあまり疑わずに維持しているため、パーソナリティが硬いという問題点があるという。そして、そのままモラトリアムを経験しないままにいる人には、親子分離が上手くできなかつたり、親に飲み込まれる不安を抱えてしまう傾向があるといわれる。アイデンティティを自分自身で模索し、獲得しないことは、様々な弊害をもたらす可能性があるのである。このように、アイデンティティを獲得するために、「アイデンティティの拡散」や「役割否定」を経験し、自分自身で試行錯誤して自己を確立することは、後の発達段階や生き方に大きな影響を与える重要なものであるといえる。

(3) アイデンティティの模索の意義

青年期は、第二次性徴、運動能力の発達、社会的成熟、アイデンティティの獲得といった心身両面から大人へと成長していく時期であり、多様な発達の側面を有する。また青年期は、本来著しく内省的になり、自分の心身の変化や自分が他人からどう見られているかに気づき、それによって苦しみを伴うこともある時期である。青年期の自己中心性は内省と密接に関係しており、「青年は生成しつつある自己を理解しようとする新しい段階に入ると、しばらくは内的世界のこの側面が重要な関心事になる」のである⁴⁰。青年が自己中心的になることは、成長において異常なことではないといえる。また、自己概念が多様であるように、対処と適応の指標である自尊感情も多様であるという。一般的に女子の方に自尊感情が低いという男女の差や、民族における差があることも報告されている。そして、自尊感情に影響を与える要因の一つである、重要な意見を持つ「他者」は、青年期以前の「両親」から、青年期以後は、「仲間」が徐々に重要になっていく。この自尊感情は個人の行動や振る舞いにも影響し、アイデンティティの獲得にも関係してくる。

また、友人関係も青年期に入り、成人期へと進むにつれて変化していく。仲間による社会化は、大人の世界の価値を媒介し、より平等な対人関係のタイプを子どもにもたらし、より大きな社会の現在の動向やさらには流行も伝え、視野を広げ、大人の権威から独立してふるまう能力を伸ばすのに役立つともいわれている⁴¹。友人関係において、社会性を身に付けていく訓練をするのである。このような友人関係も、青年期が進むにつれて幾つの特徴を持つようになる。まず、年齢が上がるにつれて排他的になる。また、多くの研究者が「青年期中期に仲間から受容されたいという欲求がある」ことを指摘している⁴²。青年期中期には、友だち集団への同調が高まるが、その後自身の独自性や主体性に自信を持ち、社会的役割が明確になることで、同調や仲間から認められたりサポートされることにそれほど頼る必要がなくなる。このような傾向は、本稿の調査結果における大学生と高校生の「友人関係の悩み」の内容にも表われているといえる。大学生では、人間関係の適度な深さや広さ、質について悩んでいる者が多く、高校生は中身のある深い人間関係を求める内容の悩みが多くみられる。場面によって自己を使い分けることや他人への不信、不安を抱きながらも、どうにか親しい人間関係を創っていかうと悩む高校生や、試験的に自己の使い分けを行ってみるが、これまでの価値観からこのような生き方に抵抗を感じている大学生など、青年たちが試行錯誤している様子が、調査結果からうかがうことができる。また、大学生の調査結果からは、人間関係を社会的な位置づけにおいて捉えている見方も出始めており、同じ青年期の中においても、年齢や環境、個人によって発達の度合いが異なっていることが分かる。

これらのことから、調査結果にみられる高校生が、「人に親切にしようとしながらも、親しくない人とは距離を置いてしまっていること」は、必ずしも問題があると決めつけることはできない。多様な自尊感情を持ち、多様なアイデンティティ獲得における危機に直面している高校生同士が、友人関係の中で自分の生き方や自分自身を模索しているのである。このような理由から、青年期前半の高校生が直面していると考えられる成長段階の中身を考慮することなく、大人や社会がこの時期の高校生の心理状態や行動を、過度に一般化したイメージで捉えたり、否定的な見解から短絡的に社会問題として俎上にのせることは、彼（女）たちにとっての大切な試行錯誤の時期を脅かすことになりかねないといえるだろう。

(奥田彩海)

おわりに

本稿は、青年期前半の高校生の意識のうち、特に人間関係、友人関係の捉え方について、伝統的な青年像に関する議論の枠組み、発達科学的な知見、社会科学的な概念枠などをベースに、若干のアンケート調査を実施することにより、その現代の実像に迫ろうというものであった。

特に、高校生が捉える友人関係の特徴として、「深い友人関係」と「浅い友人関係」の別があること、高校生は「深い友人関係」を希求していることに焦点化して論じてきた。「深い友人関係」と「浅い友人関係」は、関係に応じた「自己の変化」に依っており、この変化は「アイデンティティの拡散」といった否定的なものとしては自覚されていない。西洋文化を背景にもつ心理学一般では、「アイデンティティの拡散」として捉えられることが、現代日本の高校生自身にはごく自然なこととして捉えられていることがある。すなわち、日本人においては、自己概念が明確かつ一貫していることは必ずしも重要ではなく、むしろ場面や相手との関係に応じて適切に自己を変えることが柔軟性の現れとして受容されている可能性がある。この捉え方からは、現代における日本の青年に問題があるという場合、どこに問題があるのかについて、再度、慎重に議論をする必要がある⁴³。西洋において自己拡散と映る否定的な自己が、日本においては柔軟な積極的な自己であるかもしれない。そうであれば、佐久間が指摘するように、当事者自身がどのように理解しているのかという自覚のレベルから研究を進めなければならない⁴⁴。

「情緒肥大化」しているといわれる青年像や、知らない人との付き合い方（対人関係）を苦手とするという日本の青年像－40年ほど前の青年像－は、現代においてもさほど変わっていない。過去の青年（像）にはなく、現代の青年（像）に出現した独自の消極的な特徴があるとしても、その特徴を直ちに、現代の青年全体へと一般化するには慎重でなければならない。それどころか、この一般化によって逆説的に、個々の青年自身を否定的な青年像に相応しい姿へと追い込んでしまうという「思いがけない効果」についても注視していかななくてはならない。（松下晴彦）

【註】

- 1 松原治郎『日本青年の意識構造』弘文堂、1974年。
- 2 同書、53頁。
- 3 共生社会政策統括官 青少年育成「青少年に関する調査研究等」（<http://www8.cao.go.jp/youth/index.html>）
- 4 同ホームページ
- 5 速水敏彦『他人を見下す若者たち』講談社現代新書、2006年、171頁。
- 6 諏訪哲二『オレ様化する子どもたち』中央新書ラクレ、2005年、62 - 65頁。
- 7 岡田努『現代青年の心理学―若者の心の虚像と実像』世界思想社、2007年、164頁。
- 8 同書、2、3、11頁。
- 9 同書、29頁。
- 10 岡田は346名の大学生（男子115名、女子231名）を、日常の行動や友人関係のパターンから三つのタイプに分類した。中学、高校生も含めたデータでも、同じようなグループに分類されると

- いう。(同書、90頁。)
- 11 同書、51 - 52頁。
 - 12 同書、55頁。
 - 13 同書、57、59頁。「群れ指向群」(表面群)については、他者の視線や評価におびえるタイプと、そうした不安をまったく感じないタイプに細分化できるという。(同書、162頁。)
 - 14 同書、65頁。
 - 15 同書、97頁。
 - 16 同書、96頁。
 - 17 同書、68頁。
 - 18 同書、70頁。
 - 19 佐久間路子『幼児期から青年期にかけての關係的自己の發達』風間書房、2006年、1頁。
 - 20 同書、16 - 17頁。
 - 21 ウィリアム・ジェームズ著、今田恵訳『心理学 上巻』岩波書店、1939年、221 - 222頁。
 - 22 佐久間路子、前掲書、279頁。
 - 23 同書、280頁。
 - 24 同書、268頁。
 - 25 同書、211頁。
 - 26 同書、211 - 212頁。
 - 27 同書、212頁。
 - 28 同書、213頁。
 - 29 同書、215頁。
 - 30 エリクソンの8つ人生の段階と、各段階における社会・心理的發達段階は以下の内容となっている。
 - ①乳幼児期：基本的信頼 vs. 不信感、希望 (hope)
 - ②幼児前期：自律性 vs. 恥・疑惑、意思 (will)
 - ③幼児後期：自発性 vs. 罪悪感、目的 (purpose)
 - ④学童期：勤勉性 vs. 劣等感、有能 (competence)
 - ⑤青年期：アイデンティティ vs. アイデンティティ拡散、忠誠 (fidelity)
 - ⑥成人前期：親密性 vs. 孤立、愛 (love)
 - ⑦成人期：世代性 vs. 停滞性、世話 (care)
 - ⑧老年期：統合性 vs. 絶望、知恵 (wisdom)
 - 31 E. H. エリクソン、J. M. エリクソン著、村瀬孝雄、近藤邦夫訳『ライフサイクル、その完結』みすず書房、2001年、75頁。
 - 32 同書、96頁。
 - 33 同書、97頁。
 - 34 J. コールマン、L. ヘンドリー著、白井利明、若松養亮、杉村和美訳『青年期の本質』ミネルヴァ書房、2003年、73頁。

- 35 同書、75頁。
- 36 同上。
- 37 E. H. エリクソン、J. M. エリクソン、前掲書、98頁。
- 38 同上。
- 39 マーシャの提唱した4つのアイデンティティの状態、いわゆるアイデンティティ・ステータスは以下の通りである。
- ①アイデンティティ達成型
危機を経験し、それを自分のやり方で解決し、現在は職業やイデオロギー、社会的役割にしっかりと関与している。
 - ②モラトリアム型
アイデンティティへの苦闘をまだ解決していないが、通訳を行うために積極的に選択肢を模索している。
 - ③早期完了型
危機はまだ経験していないにもかかわらず、自分の目標や信念に関与している。それらは多くの場合、他者によって決められたものである。
 - ④アイデンティティ拡散型
アイデンティティの危機をまだ経験しておらず、職業や信念についていかなる関与もしていない。また、関与するための積極的な試みの兆しもない。
これらは、必ずしもあるステータスが他のステータスの先行条件にあるわけではない。ただし、モラトリアムだけは、その特徴である探求がアイデンティティの問題の解決に先立つ。(J. コールマン、L. ヘンドリー、前掲書、76 - 77頁。)
- 40 同書、67頁。
- 41 同書、182頁。
- 42 同書、185頁。
- 43 佐久間路子、前掲書、29頁。
- 44 同書、31頁。

Peer Relationships and Friendship in the Japanese High School Students

Masumi Iwase*, Ayami Okuda* and Haruhiko Matsushita**

The purpose of this research is to investigate how the Japanese adolescents today make their peer relationships and friendship.

Firstly, the paper reviews the research on the Japanese youth or youth culture of the past and the present, and the comparative studies on the ways of developing friendship between Japanese youth and foreign countries' youth. In the well-known research in 1974, Matsubara reviewed several surveys on adolescents in those days and pointed out the following facts; one of four young people in Japan answered that he (she) did not have close friends while searching for intimate friendship; even though the young people in Japan apparently had a tendency to show themselves as being indifferent, they actually wanted close, empathic and supportive relationship with other people. The recent studies on the attitudes and characters of the present youth (for instance, Hayamizu, Suwa and others) have been colored by the relatively negative views. They characterized the young Japanese as people who tended to define themselves as being illusionary almighty or virtual competent even if they were not.

Secondly, the paper analyzes the result of our survey on peer relationship and friendship among high school students and college students in Tokai areas. They were given the questionnaire of 14 questions and also asked to write their own ideas on friendship. The findings of our investigation are that most of high school students seek to enjoy deep friendship although they seem to feel some difficulties in keeping their peer relationship sound. On the other hand, among their friends, they tend to make a difference between a deep friendship and a shallow one in daily life. These results of our survey are supported by Tsutomu Okada's research. He categorizes the young into three types; the one who wants to be in group, the one who wants to shut oneself away, the one who wants to associate with his or her friends individually. In Okada's view, the third type, the traditional type, has decreased in number. Another recent research which supports our results is Michiko Sakuma's analysis on self-identity of the youth. Following W. James' idea that one develops multiple social-selves in accordance with the number of others who recognize him or her. Sakuma points out that one shows himself or herself as different selves in

* Graduate Student, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

** Professor, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

different interpersonal contexts. In her view, the different selves in the same one person do not mean the diffusion of self-identity.

Thirdly, the paper explores the studies on the development of self-identity. In Eriksonian ideas, identity and the diffusion of identity must both be understood and accepted in order for fidelity to emerge as a viable solution in adolescence. But our investigations and Sakuma's study suggest that the diffusion of identity has been rather positively accepted among the young in Japan. They show themselves as different selves in different situations.

The paper concludes that the negative evaluation on the young in Japan should not be generalized. It is true that quite a few people insincerely associate with their friends, but also true that they really wish to be befriended heartedly. Our study suggests that we have to be careful not to impose the negative image of young on adolescent so that they virtually take on such negative effect.